

学部段階における心理査定の教育の現状： 心理検査の採用状況を中心に

福田 雄一¹⁾

Current Status of Teaching Psychological Assessment in Undergraduate : Adoption of Psychological Tests

Yuichi Fukuda

要約

本稿では、大学学部段階における心理査定教育の現状を、41大学66科目のシラバスの分析によって描き出した。心理検査の実習を含む授業科目は、多くの大学で2年前期から3年後期にかけて開講されているが、実習する検査の種類や実習に割り当てる時間数には多様さがみられた。心理職の国家資格化や、それに応じた養成カリキュラムの具体的な運用にあたり、学部段階で何をどこまで扱うか、心理査定をどう教えるかという論点は、教育実践をふまえて今後も引き続き議論する必要がある。

キー・ワード：心理査定、心理検査、学部教育

問題と目的

公認心理師法が先の第168回国会で成立し、数十年前から議論が行われてきた心理職の国家資格化がようやく実現することとなった。公認心理師国家試験の受験資格を得るための養成課程は複線化され（公認心理師法第七条）、臨床心理士資格認定試験が要求していた（指定）大学院修士課程修了に加え、心理学関係の学部卒業プラス実務経験のルートも認められることになった。それぞれの養成課程でどのような内容の教育を行うかというカリキュラムについても、すでに関係各所で議論が行われ、複数の案が公表されており、心理学関連の学科をもつ大学の中には、早くも公認心理

師養成への対応を広報発表するところも散見するようになった。

養成課程のカリキュラムは現時点（2016年1月）では明らかでないが、日本心理臨床学会（2014）は学会内で検討したカリキュラム案を公表している。その案によると、学部段階で合計46単位の専門科目を履修させることになっており、必修の「心理学基礎科目」（計12単位）の中に「心理検査実習」（2単位）が含まれている。この案は、国家資格化に向けた活動を行ってきた三団体（日本心理学諸学会連合、臨床心理職国家資格推進連絡協議会（推進連）、医療心理師国家資格制度推進協議会（推進協））での合意案（三団体会談、2015）にも同様に反映されている。

「心理検査実習」の具体的な内容は、公認心理師法に基づいてこれから制定・発出される政令や

1) 広島文教女子大学人間科学部心理学科

通達によって定められることになると思われるが、学部段階における心理検査の教育のあり方についてこれまで大きく関心が寄せられたことは少ないと思われる。公認心理師法が想定する受験資格のルートの一つは、学部卒業後に臨床現場へ就職し、実務経験を積んで国家試験を受験する、というものである。このルートを想定すると、現状の臨床心理士資格（大学院指定制度）が要求している教育内容や水準がそのまま学部教育に当てはめられることはないにしても、かなり実践の現場を意識した内容が公認心理師カリキュラムに求められる可能性は十分にある。

これまでの研究では、現場の心理臨床家が用いている心理検査を調査したもの（小川・田辺・伊藤，1997；津川，2009）があり、上位にはバウムテストやロールシャッハ・テスト、YG性格検査、田中ビネー式知能検査などが挙げられているが、これらの検査をすべて実際に施行したり解釈したりできるようになるまで教えることは、上述の「心理検査実習」2単位プラスアルファでは不可能といわざるをえないし、またそうすべきでないとも思う。なぜなら、心理学を学べる大学の現状として（一部の例外はあるとしても）全員が心理専門職をめざすわけではなく、心理検査の内容を「教えずぎる」ことは倫理的にみても必ずしも好ましいこととはいえないからである。それでは、学部段階における心理査定教育はどのようにあるべきなのか。どの心理検査を授業で取り上げるべきか、またどのように授業を展開すべきだろうか。

以上のような状況をふまえて本稿では、いわば「公認心理師前夜」ともいえる現在の、大学学部段階における心理査定教育の状況をまずは調査し、今後のカリキュラムや授業設計を行う上での課題を明らかにしたい。

方法

対象校 中国・四国・九州地区の四年制大学で、心理査定に関する内容を扱った専門科目を開設している41大学を対象とした。具体的には、財団法人日本臨床心理士資格認定協会が指定する「臨床心理士」養成指定大学院をもつ36大学と、日本心理学会のウェブサイト「心理学を学べる大学」

（日本心理学会，2016）にリストアップされている50大学である（2012年10月から2014年9月の間の日本心理学会「認定心理士」申請者数が20名以上、もしくは日本心理学会会員が5名以上所属）。両者はかなりの部分で重複するが、前者・後者とも学部段階に心理査定関係の科目をもたない大学は対象から除外した。

手続き 各大学のシラバスを検索し、「心理検査法実習」「心理アセスメント演習」などのように、心理査定の実習や演習を行うことが授業科目名から読みとれる専門科目のシラバスを抽出した。また、「臨床心理学」「心理学研究法」などのように、心理査定に関する内容が科目名で直接示されていなくても、シラバスに記された各回の授業内容から心理査定の実習が行われていることが読みとれるものは、あわせて分析の対象とした。最終的に分析の対象となった科目は、66科目であった。

結果

(1) 開講科目名

「心理検査（法／実習）」を標榜したものが14校と最も多く、配当学年・学期の差によって「Ⅰ」「Ⅱ」などと積み上げ方式のカリキュラムにしているところが多かった。開講科目数の多いところでは、講義科目と実習・演習科目を分けているところもあった。このほか、「心理アセスメント（実習）」「心理査定（法）」などの表記が複数の大学でみられた。「心理テスト」という表記を用いていたのは1校のみであった。

なお、心理検査（査定／アセスメント）の表記はないが、「臨床心理学演習」「カウンセリング論」などの科目において、実際には心理検査の実習を行っているものもあった。また、「心理学実験」「心理学研究法」などの実験・研究法に関する科目の一部で心理検査の実習が行われていた。

(2) 開講学期、単位数

科目の開講時期を図1に示した。1年後期から4年前期まで分布しており、2年後期から3年後期での開講が最も多かった。心理査定の実際を学ぶには、その背景となる臨床心理学や心理測定、心理

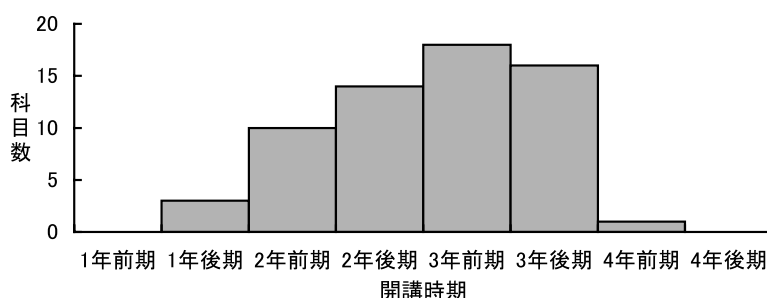


図1 心理査定系専門科目の開講時期

統計の理論・知識が必要とされるが、それらの履修を前提としたカリキュラムになっていると推測される。

単位数は授業形態とも関連するが、最少では演習・実習1科目（1単位）のみの開講となっているところがあり、最多では講義4科目（8単位）が開設されていた。学則上の授業形態を「講義」（30時間の授業に対して2単位を付与）としていても、実質的には心理検査の実習を行っているところが少なくなかった。

(3) 心理検査の採用状況

本節では、各科目で採用されている心理検査のリストアップを行う。作業にあたっては、シラバスからわかる範囲で各検査にあてられている授業回数（コマ数）を○囲み数字の中に示した。心理検査を扱う授業回数が不明であった科目については、○のみ示した。従って、○囲み数字の個数と○の個数を合わせた数が、分析対象66科目中の採用科目数ということになる。

1) 発達・知能検査

発達検査・知能検査の採用状況を表1に示した。知能検査では、個別式知能検査を採用している大学が多数を占めたが、集団式知能検査を取り上げている大学も少数ながらみられた。発達障害のアセスメントというニーズから、ウェクスラー式の知能検査を採用する大学が多くなってきているが、ビネー式知能検査も14科目で採用されていた。この背景には、児童相談所における心理判定で用いられていることが関連していると思われる。授業回数についてみると、個別式知能検査では施行

や解釈まで取り扱うことを考えると、少なくとも3～4コマは必要かと思われるが、1コマのみの大学も複数あった。シラバスに実習の詳細な内容まで記したものは少ないため断定は難しいが、概説や演示、内容を限定した模擬実習などの形態にとどめているとも考えられる。なお、発達検査では、遠城寺式分析的乳幼児診断法を採用した大学が最も多かった（7科目）。

表1 発達検査・知能検査の採用状況

区分	事項	採用科目数、コマ数
知能検査	知能検査	⑨
	ビネー式知能検査	③②①
	田中ビネー式知能検査	④④④③③②②①①
	鈴木ビネー式知能検査	①
	田中ビネー式知能検査V	①
	ウェクスラー式知能検査	⑦③③③②①①①①
	WISC	⑤④④②
	WISC-IV	⑥⑤④②
	WISC-III+WISC-IV	⑤
	WAIS	⑤③
	WAIS-III	③②○
	WISC+WAIS	①
	WISC-IV+WAIS-III	②
	集団式知能検査	①
発達検査	田中B式知能検査	①
	発達検査	②①
	遠城寺式分析的乳幼児診断法	②①①①①①①
	津守・稲毛式発達検査	①①
	KIDS 乳幼児発達スケール	①
	新版K式発達検査	④①○
	K-ABC	①
	K-ABC II	①
	新版K式発達検査+K-ABC	①
	DAM	②①①
その他	コース立方体組み合わせテスト	④②
	S-M 社会生活能力検査	①

2) 人格検査

人格検査の採用状況を表2に示した。最も多く採用されていたのは、他の検査との複合などもあわせてカウントすると、YG性格検査と内田クレペリン精神作業検査の23科目であった。投影法ではロールシャッハテストが最多で17科目、バウムテストが15科目で採用されていた。授業回数は投影法で多くなる傾向にあったが、ロールシャッハテストの回数は1～8回と最も広くばらついた。個

表2 人格検査の採用状況

区分	事項	採用科目数、コマ数
質問紙法	人格検査、性格検査	752①
	質問紙法	6443331①〇
	質問紙法（+描画法）	①
	YG	3222222②① 1①1①1①1①
	YG+MMPI	①
	YG+TEG	①
	YG+TEG（+POMS）	⑥
	YG（+クレペリン）	①
	YG（+STAI）	①
	YG（+GHQ）	①
	MMPI	222222222② ①
	エゴグラム	3①1①
	TEG	432221①1①
	主要5因子性格検査、FFPQ	①1①1①
	NEO-PI-R	3①
	MPI モーズレイ性格検査	①
	投影法、映映法	66443322①
	ロールシャッハテスト	876554433 2221①1①〇
	TAT 主題統覚検査	42①1①①
	描画法	3①1①①
投影法	描画法（+質問紙法）	①
	バウムテスト	3222222②① ①1①1①①
	バウムテスト（+PF スタディ+クレペリン）	⑥
	バウムテスト+風景構成法	②
	HTP	②
	S-HTP	322①1①①
	人物画	①1①①
	家族画	①
	雨中人物画	〇
	風景構成法	2222①1①1①① 〇
	星と波テスト	①
	作業検査法	3②
	クレペリン	432222222② 222①1①1①①① ①
	クレペリン（+YG）	①
	クレペリン（+バウムテスト+PF スタディ）	⑥

別式知能検査と同様に、分析や解釈まで扱う科目がある一方で、概説や演示、模擬実習などのみにとどめる科目があるものと考えられる。

3) その他の心理検査

その他の心理検査の採用状況を表3に示した。気分状態やストレスコーピングを質問紙形式で測定するもの、抑うつや不安など精神症状を測定するもの、神経心理学的な検査や認知症のスクリー

表3 その他の心理検査の採用状況

区分	事項	採用科目数、コマ数
気分・ストレス関連	気分・ストレス	①
	ストレス	①
	SCI	①
	POMS	③
	POMS（+YG+TEG）	⑥
	TAC（+GHQ）	①
	症状尺度	①
	抑うつ不安	①
	不安尺度	①①
	STAI	①①①
症状尺度	STAI（+YG）	①
	STAI（+MMSE+構造化面接法）	⑥
	抑うつ尺度	①
	BDI	②
	BDI+GHQ	①①
	CMI	①①
	GHQ	①
	GHQ+STAI	③
	GHQ（+TAC）	①
	WHOQOL	②
神経心理・認知症関連	神経心理学的検査	②
	認知機能検査	③
	WMS-R	②
	認知症スクリーニング	①
	HDS-R	①
	HDS-R（+DAM）	①
	MMSE	①
	MMSE（+STAI+構造化面接法）	⑥
	職業レディネス	③
	職業興味	①
その他	GATB	①
	親子関係	①③
	親子関係その他	①
	BGT	22①①
	ITPA	①
	発達障害（AQ, PARS-TR, Conners-3）	①
	PARS	①
	音声・言語・コミュニケーション	①
	社会生活	①
	視覚・聴覚	①
	言語対連合+WCST	①

ニングに用いられるもの、職業に対する興味や適性を測るもの、などが挙げられた。最も頻度の高い検査でもSTAI（状態・特性不安尺度）やGHQ（精神健康調査票）の5科目、BGT（ベンダー・ゲシュタルト・テスト）の4科目であり、特定の検査が高頻度で用いられるということではなかった。

4) その他、授業運営上の特徴

少人数での実習とするために複数クラスを開講している科目があった。また、心理検査の実習とは異なるが、行動観察や面接法についての演習を行っているもの、質問紙を作成させるもの、箱庭やコラージュを制作させるもの、構成的エンカウンター・グループなどの活動を実施するものなどがみられた。講義科目と実習科目をあわせて開設している大学の中には、実習前試験を課して実習科目を履修するための条件にしているところがあった。

考察

本稿では、学部教育における心理検査の採用状況を現状として示した。種々の心理検査の間で採用頻度の違いがあることが明らかになっただけでなく、同じ心理検査でも授業回数の差は養成校によってかなり異なっていた。このような違いは、履修する学生の数や希望する進路の状況、心理検査に対する動機づけのありよう、担当教員の専門領域、専門教育カリキュラム全体における心理査定教育の位置づけなどの要因から生まれると考えられる。

実際にどのような授業が展開されているかについては、シラバスの分析からは十分に明らかにはならなかった。これまでの学部段階の教育では、実習の前後に教員が検査の概説を行い、施行法や解釈法を講義し、学生自身の結果を解釈させ、自己理解を目的としたレポートを課す、といった内容が組み込まれていることが多いと思われる。こうした流れは、専門職をめざす学生にとっては将来必要とされる専門性の基礎づくりに役立つと考えられるし、そうでない学生にとっても自己理解に関する欲求あるいは心理検査に対する関心を充足するだろう。しかしながら、心理検査の体験が

本来的な自己理解を深めることにつながるのか、心理ゲーム感覚で興味本位にとらえられて終わるということになりはしないか、といった危惧が残る。大学院段階での心理査定教育を論じたものに比べ、学部段階のそれは未だに数が少ないが、例えば片本（2005）はバウムテストを、花田（2015）は知能検査をそれぞれ題材として、自らの教育実践をふまえて学部生を対象とした教育方法の工夫や、それが学生にどう体験されたかについても論じている。両者に共通するのは、なまの臨床事例や検査道具そのものの用いることには倫理的なリスクが伴うこと、またそれらを必ずしも用いなくとも、所期の教育効果を上げる工夫を検討すべきではないかということである。

これまでの学部教育は、大学院に進学して臨床心理士をめざす者への基礎教育という一方で、専門家とならない者への心理学教育という二つの役割を担ってきたが、今後は公認心理師養成教育という新たな役割が加わることになる。学部卒業後に実務経験を現場で積むことを考慮すると、どの心理検査を学部教育で採用すべきかという問いは引き続き一定の意義をもつと考えられるが、どのように教えるべきかという授業展開のあり方についても、教育実践をふまえながら検討を重ねていく必要があると思われる。

引用文献

- 花田利郎（2015）. コース立方体組み合わせテストを活用した知能検査の教育方法の検討 西南学院大学人間科学論集, 10（2）, 95-113.
- 片本恵利（2005）. 樹木画の対提示による心理アセスメントに関する実習の試み —臨床心理基礎実習におけるバウムテストの解釈に関する実習— 沖縄国際大学人間福祉研究, 3（1）, 37-53.
- 日本心理学会（2016）. 心理学を学べる大学 <<http://www.psych.or.jp/interest/univ.html>>（2016年1月31日閲覧）
- 日本心理臨床学会（2014）. 「公認心理師」（仮称）受験資格学部教育カリキュラム案 <<http://www.ajcp.info/pdf/k-curriculum>>

_20140426.pdf> (2016年1月31日閲覧)

小川俊樹・田辺 肇・伊藤宗親 (1997). わが国における臨床心理検査の現状 日本心理臨床学会第16回大会発表論文集, 116-117.

三団体会談 (2015). 公認心理師養成 学部カリキュラム案 < http://3dantai-kaidan.jp/siryou/003_curriculum_UG20151106.pdf > (2016年1月31日閲覧)

津川律子 (2009). 精神科臨床における心理アセスメント入門 金剛出版